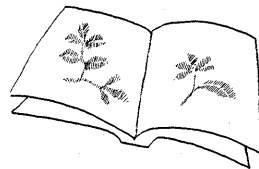


特集 へ緑蔭図書紹介へ

あなたがいるってことだけで

倉持 清美



私が母親になってから十年がたつが、その間に子ども達にいろいろな絵本を読み聞かせてきた。そんな中で、子どものために買った絵本が、いつの間にか自分にとって大切な絵本になったりする。ここでも取り上げる絵本は、そんな絵本の中の一つである。『まっけてね』はシャーロット・ゾロトワというア

メリカの作家によって書かれた絵本である。彼女は一九一五年にヴァージニア州で生まれ、ニューヨーク郊外の豊かな自然の中で育った。他にも、『しあわせのモミの木』『いまがたのしいもん』など、みらい・なな訳で、たくさん絵本を書いている。子どもとの交流、自然との交流の中で作品を立ち上げ

たと想像できるような、とてもほのぼのした気分になる作風を持っている。

『まっつてね』は、幼稚園年少から年長くらいの子さい女の子が主人公である。結婚したお姉さんが里帰りしたとき、何でもできるのに驚いた女の子が、母親に大きくなり、何でもできるようになるまでまっつてねと、話しかける内容である。例えば、

「いまにねえさんみたいになって」「じゅうたんにパンくずをおとさないし」「かあさんのびんせんをかっつてにつかわない」「つぎからつぎにスカーフをだしたり」「ネックレスをつけてみたりしないのよ」

「ふとんに、マーカーをつけちゃったり」「デザイナーをつまみぐいしないし、うえきばちをけとばさないわ。」と言っていく。これまでさんざん母親に注意されたことをあげているのだろう。そして、「だからまっつてね。きつといるんなことができるひとになっつてかあさんにあいにくるわ」。それに対し母

親が続けて、「まっつてるわ、あいたくなっつたらいつでもきてね」「いまはうえきばちをたおしたり」「できないことがたくさんあるけど」「ちゃんどできるよようになるのね。なんてうれいんでしょ」。「あなたがいるってことだけで、かあさん、しあわせなのに」という。小さい女の子は、それを聞くと、「わあーい」と歓声を上げて母親に抱きつく。その場面で絵本は終わっている。

この絵本を読んでいつも思い出すのは、研究仲間が立ち上げているネット上の子育て相談に寄せられたメールである。おおよそ次のような内容であった。「私は外向的でなく友達を作るのが苦手です。夫は子どもにはたくさん友達を作ることが大切だという。私も、子どもには同年齢の子どもと遊ぶことが大切だと考えています。今から公園に出かけていって、子どもと同年齢の友達を作るには、どうしたらよいでしょうか」。この相談内容を見て、子ど

もの年齢をどれくらいだと思っただろうか。私は、公園に行くことを考えているのだから、そろそろ自分で移動ができる年齢、一歳前後ではないだろうかと思っていた。しかし、相談者の子どもは、四ヶ月の赤ちゃんだったのである。このくらいの赤ちゃんなら、お友達を作ることよりも、母親や父親など養育者との関係をしっかりと作ることがまず大切になる。それを、子どもの成長の先の先を読み、今の子どもの実態とそぐわない相談をしていく親が時々いる。子どもの成長を早く早くと望んでいるような気がしてならない。この相談者は、さらに子どもの知的発達を促すおもちゃとしてどのようなものを購入すればよいのかも尋ねてきた。目の前にいる子どもと、しっかりと向き合えないままの生活をしているのかと思うと、心が痛くなってくるような相談であった。確かに、子どもを育てることは、子どもが自立して社会に出ていけるようにしていくことだろう。

『まっけてね』のお母さんが子どもの、いろいろできるようになるからまっけてねということばに対して、「ちゃんとできるようにするのね、なんてうれしんでしょ」と応える気持ちは、子育て中の母親にとつて共感できるものだろう。自分でご飯を食べ、自分でお風呂に入つて、部屋を汚さずに使つてくれるようになる、なんてすばらしいことか、と。でも、今だつて大変だけど幸せな気分も感じているのはどうしてだろう。それはまさに、小さい女の子のお母さんが言う「あなたがいるってことだけで、かあさん、しあわせなのに」ということなのだろう。いろんなことが上手にできないけれど、あなたの存在そのものが私の幸せと感じられることで、子育て中の母親はいろいろな困難を乗り越えることができるのだ。ただ、そうした幸せを感じるためには、母親に余裕がなくてはいけない。先ほどの相談者のように、夫までが「子どもに友達が必要だか

ら」と母親に公園へ行けという圧力をかけてくるようでは、なかなか子どもと今の生活を楽しむゆとりが生まれてこない。

ひるがえって、私自身はどうだろう。子どもが寝てしまってから帰宅すると、部屋中滅茶苦茶でひどくがっかりする時がある。疲れて帰ってきて、部屋も片づけなくてはならないのか、と思うといらいらもしてくる。最初はこんなに散らかして、と、読み散らかした絵本や描きかけの絵などを片づけているが、次第に、今日はお店やさんごっこをお姉ちゃんとしたのだな、とか、この絵本は良く読んでいるな、とか、自分のいないところでの子どもの生活が見えてくる。片づけているうちに、子どもの生活の断片を拾い集めている様相になり、それをつなぎ合わせて子どもの様子を思い浮かべてくすくす笑ったりしている自分に気がつく。そして、子どもの寝顔を見に行き、柔らかい頬に触れたりすると、「あな

た達がいるだけで幸せ」という気分になってくる。私にはまだそう思えるだけのゆとりがある、ということがわかると、自分に安心したりもする。『まっけてね』はそのことの大切さを私に教えてくれる絵本である。

(学芸大学)

